

☆年間第28主日(10月11日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (イザヤの預言 5章 1～7節)

万軍の主はこの山で祝宴を開き、すべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。

主はこの山で、すべての民の顔を包んでいた布と、すべての国を覆っていた布を滅ぼし、死を永久に滅ぼしてくださる。

主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい、御自分の民の恥を地上からぬぐい去ってくださる。

これは主が語られたことである。その日には、人は言う。見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってくださる。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう。主の御手はこの山の上にとどまる。

第二朗読 (使徒パウロのフィリピの教会への手紙 4章 6～9節)

皆さん、わたしは貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。それにしても、あなたがたは、よくわたしと苦しみを共にしてくれました。

わたしの神は、御自分の栄光の富に応じて、キリスト・イエスによって、あなたがたに必要なものをすべて満たして下さいます。わたしたちの父である神に、栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

福音朗読 (マタイによる福音書 21章 33～43節)

そのとき、イエスは祭司長や民の長老たちに、たとえを用いて語られた。「天の国は、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている。王は家来たちを送り、婚宴に招いておいた人々を呼ばせたが、来ようとしなかった。

そこでまた、次のように言って、別の家来たちを使いに出した。『招いておいた人々にこう言いなさい。「食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、すっかり用意ができています。さあ、婚宴においでください。』』しかし、人々はそれを無視し、一人は畑に、一人は商売に出かけ、また、他の人々は王の家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまった。そこで、王は怒り、軍隊を送って、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。そして、家来たちに言った。『婚宴の用意はできているが、招いておいた人々は、ふさわしくなかった。だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。』そこで、家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになった。王が客を見ようと入って来ると、婚礼の礼服を着ていない者が一人いた。王は、『友よ、どうして礼服を着ないでここに入って来たのか』と言った。この者が黙っていると、王は側近の者たちに言った。『この男の手足を縛って、外の暗闇にほうり出せ。そこで泣きわめいて齒ぎしりするだろう。』招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。』

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

信徒の皆さんお元気ですか。今日は14号台風が関東沖を通過しています。もう4日連続で雨が降っています。今年の天気状況は意外にはっきりとしていますね。雨が降るときはいっぱい降るのですね。

さて、今年のノーベル平和賞は国連の機関「WFP」というところが受賞しました。「世界食糧計画」という機関で、世界中の食糧不足に対する援助を担っている機関と言われています。現在、世界は科学の技術進歩に支えられて豊かになったかのように見えますが、実に多くの国々ではその日の食べ物にも事欠く生活を強いられている人々がいるのです。その貧富の差は昔より今のほうが圧倒的にひどい状態です。旧約聖書には食べ物を求める人々と、食べ物をもって人々を養われる主である神との物語が展開されています。

第一朗読 (イザヤの預言 5章1～7節)

古来、食べること、そしてその象徴である祝宴は神から祝されたしるしでした。今日のイザヤの預言はそのことを語っています。「良い肉と古い酒」を供されることは何よりも祝された状態を表しています。そのように最高のもてなしをもって神はイスラエルの民を呼んでおられたのでした。そして人々の悲しみのもとであった「死」の布を取り去り、その目の涙を拭いてくださるのです。そして、「その日には、人は言う。見よこの方こそ私たちの神。この方こそ私たちが待ち望んでいた主。」と叫ぶのです。この主に信頼することが民の祝福の元なのです。祝宴に招かれることの喜びは今に始まったことではなかったのです。今も日本では園遊会や桜を見る会、卑近な例では結婚披露宴などでそこに招かれた喜びを実感することができます。私たちを導かれる神は私たちを支配する神ではなく、喜びを共にすることを喜ぶ神なのです。

第二朗読 (使徒パウロのフィリピの教会への手紙 4章6～9節)

ここではパウロに対して主である神はイエス・キリストを通して祝福を与えてくださっていることが語られています。特にフィリピの信徒の方々がパウロを物心両面において助けてくれたことが語られ、パウロは感謝を現わしているのです。それはキリスト・イエスを通してなされたことを現わしています。主に信頼することがどれほど大切であるかをパウロは強調しているのです。第二朗読の前に歌われる「答唱詩編23」はよく知られた詩編ですが、第一朗読との関係だけでなく第二朗読との関係でも二重に意味を持った詩編が唱えられています。ちなみにこの詩編 23 番は葬儀などでよく歌われ、死者の霊を神のみ旨にゆだね、神の喜びの宴に導いてくださるように歌われています。

福音朗読 (マタイによる福音書 21章 33～43節)

先週は農園で働く農夫と主人の話が語られましたが、今日は王様が王子のための婚宴に招いた人々の話が語られています。招かれた人々がどのように対応するのかがカギになっています。王様の祝宴ですから大変

名譽なことですが、こともあろうに断る人が出てくるのです。その断る理由は与る名譽や喜びに比べれば実にちっぽけなものです。招かれた人々の大半はその喜びの意味や実情を知らないのです。知らないというより知ろうとしないのです。招く王様は無視されたことに腹を立て無視した人々を亡き者にし、ほかの人々を大勢招くのです。これは祝宴に招いたイスラエルの人々に対しその喜びの権利を他の民族に与えることを意味しているのです。「招いておいた人々はふさわしくなかった」。この王様の落胆ぶりは理解できます。私たちはどうでしょうか。洗礼を通して神の国の祝宴に招かれているのですが、その招きに応えているでしょうか。そうではなく、日々の何でもないような出来事を理由に神の招きを断っているのではないのでしょうか。第一朗読で語られている神の国の喜びをもう一度かみしめてみましょう。

戦後の混乱期にあつて児童養護施設の出身者の方々の社会生活の安定のために様々な活動をもって支援を続けてこられた青少年福祉センターの長谷場夏雄先生が亡くなりました。91歳でした。長谷場先生はいつくしみ深い神様のもとでゆっくりとお休みになられておられることでしょう。先生、お疲れさまでした。

長谷場先生については『**光の人**』（今井彰著；文藝春秋社）に長谷場先生の人物像、業績が書かれています。是非一度読んでいただくことをお勧めします。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光